

大学入学後一学期目の集中日本語科目と チューター制度

— 発展的評価と改善の取り組み —

Intensive Japanese Language Courses and Tutoring System in the First Semester after Entering University: Improvement through Developmental Evaluation

数野 恵理
KAZUNO Eri

〔要旨〕

本学では、より多様な国・地域からの留学生を受け入れる制度が新たに設けられ、日本語能力試験 N3 程度で入学した学生が一学期目に日本語科目を集中的に履修し、大学で必要となる日本語力を身につけ、次学期から所属学部のカリキュラムで学べるようになった。本稿の目的は、入学後一学期目の日本語科目とチューター制度の取り組みを報告し、学生の振り返りを分析することで発展的評価を行い、課題を明らかにすることである。評価の結果、学生は日本で的大学生活に慣れ、学部で学んでいくためのアカデミックな日本語の力を伸ばし、自律的に学ぶ姿勢を身につけたが、講義を聞いてノートをとる力を磨くことが課題となった。この力を伸ばすためには、語彙力をつけ、母語話者の話す速さに慣れ、話を聞きながらノートをとる練習をする必要があるが、実際の講義では、予習する、録音の許可を求める、クラスメートにノートを見せてもらうといったことも役立つだろう。

Key word: 発展的評価、チューター、アカデミックな日本語、自律的な学習態度、
ノートテイキング



1. はじめに

立教大学日本語教育センターでは、日本語科目を大学の目標と照らし合わせて、継続的に発展的評価を行い、プログラムの改善に努めている。発展的評価とは、「事業、プロジェクト、スタッフおよび（あるいは）組織の開発などを支援する目的で実施する」継続した評価活動である（パットン、2001、70）。久慈（2017）によれば、リアルタイムに情報を提供する発展的評価は「複雑な環境で激的に変化していく現実の中でイノベーションの開発・発展を支援」するものである。丸山他（2017）は、日本語教育プログラムの運営が発展的評価の実践により改善・発展したさまざまな事例を示し、評価的思考がプログラムの改善・発展に寄与することを明らかにしている。また、数野他（2021）、数野（2022）では、初年次の正規学部留学生向けアカデミック・ジャパニーズ科目について、継続的な発展的評価による柔軟かつ迅速な再計画の取り組みを示し、発展的評価とその発信は様々なステークホルダーの支持を得て迅速に科目改善をすることを可能にするものであることを指摘している。

本稿では、本学の新しい外国人留学生受け入れ制度 NEXUS プログラム（NEXt generation for Unity & Solidarity Program）における入学後一学期目の集中日本語科目とチューター制度を取り上げ、初年度となる 2022 年度の取り組みを報告し、発展的評価を行うことで、課題を明らかにする。

2. NEXUS プログラムの概要

従来、本学でも正規学部留学生には入学時から通常の学部のカリキュラムで学ぶことができる高い日本語力を求めてきたため、正規学部留学生の大部分が中国・韓国出身の学生となっている。しかし、多様な国・地域の留学生と日本人学生がともに学べるよう、入学時点では日常的な場面で使われる日本語をある程度理解することができる日本語力（日本語能力試験 N3 程度）を求め、NEXUS プログラムという新しい留学生受け入れ制度が 2022 年 9 月に開始した（立教大学、2021）。

これは、入学後一学期目に集中的に日本語科目を履修することにより、大学で必要となる日本語力を身につけて、次の学期から所属学部の通常のカリキュラムで学べるようにし、4.5 年¹⁾で卒業するプログラムである（立教大学、2022）。国立大学には古くから入学前予備教育があるが、NEXUS プログラムの特徴は学部にも所属した状態で留学生生活を開始する点である（丸山、2021）。

入学後一学期目の「日本語集中履修期間」は、「日本での生活や学部カリキュラムへのスムーズな着地を目指し、大学でのあらゆる学びに必要な日本語能力、基礎力を身につける」ための学期として位置づけられている（立教大学、2022、19）。入学が決まった学生は入学前課題に取り組み、一学期目に「NEXUS 日本語」A から J までの日本語 10 科目に加え、やさしい日本語による全学共通科目「学びの精神」を履修する。この「学びの精神」科目は 2 年次以降の正規学部生を

対象とした「多彩な学び」科目と一体的に授業が運営され、留学生は日本人学生といっしょに授業を受ける。また、一学期目にはチューター制度が設けられ、同じ学部の先輩である日本人チューターから、所属学科指定の課題図書を扱う NEXUS 日本語 I の課題準備を中心とした学習支援を受ける。

一学期目の日本語科目を修了すると、二学期目からは 4 月に入学してくる正規学部生とともに所属学部のカリキュラムで学ぶことになる。なお、4 月に入学する正規学部の留学生は原則、「大学生の日本語 6、7、8」の A、B、C、D というアカデミック・ジャパニーズ科目を初年次に履修することになっているが、NEXUS の留学生もこの科目に併置された「総合日本語 6-8」A、B、C、D を入学後 2、3 学期目に履修することが推奨される。

3. 2022 年度の NEXUS 日本語プログラムの実践

初年度となる 2022 年 9 月にはベトナムとモンゴルの高校から 3 学部 4 学科に計 4 名が入学した。学期開始前に日本語科目の一学期間の授業内容、教材は担当教師と共有してあったが、新しいプログラムであることから、学期開始後に日本語科目と「学びの精神」科目における学生の様子、課題について随時日本語教育センター長と情報を共有し、よりニーズに合った内容となるよう、学期中に授業担当者の理解を得て授業内容を一部変更した。また、チューター制度も春休みまで延長することにした。

2022 年度の NEXUS 日本語科目と「学びの精神」科目の目標、授業方法、結果と課題は「2022 年度日本語教育センター活動報告」（立教大学日本語教育センター、2023）でも公開されているが、本節では入学前課題、NEXUS 日本語科目の中でも特徴的な I クラス、これに連動して進められるチューター制度と E クラス、最後にその他の日本語科目の実践を報告する。このうち、筆者は I、E クラスの授業を担当し、日本語科目とチューター制度をコーディネートした。

3.1 入学前課題

入学が決まった学生には、4 月から 8 月まで 2 つの入学前課題に取り組んでもらった。一つは、立教漢字検定²⁾の初級後半 B3、B2、B1 のテキストとワークシートを使って学習することである。入学後には各学科指定の課題図書を読んでいく必要があるため、漢字力をつけておくことが重要となる。もう一つは、週に 1 回各自が選んだテーマで 300 ～ 400 字程度のジャーナルを書くことである。語彙、文法などは知識を持っているだけでなく、運用することが求められるため、さまざまなテーマで文章を書くことに慣れさせた。

3.2 NEXUS 日本語 I

I クラスは、学部での学修のための日本語力と学習ストラテジーを身に付けることを目標に、所属学部または学科が指定した課題図書（入門書や新書、専門書など）を活用してチュートリアル

形式の授業を行う科目である。この科目は「専門の入り口に立つ」ための科目と位置づけられる(丸山、2021)。

NEXUS プログラムの学生を受け入れる文学部、異文化コミュニケーション学部、経済学部、経営学部、社会学部、法学部、コミュニティ福祉学部、現代心理学部という8学部のどの学科の学生が入学しても対応できるよう、各学部学科には事前に課題図書を指定してもらった。学期を通して1冊の課題図書を読む学科もあれば、複数を読む学科もある。どのような教材を作るか、日本語教育センターの教員で検討し、全学科の一学期分のワークシートを分担して作成した。

2022年度は3学部4学科の計4名の学生がI-aとI-bの2クラスに分かれ、それぞれの課題図書について教員と1対1で一人50分のチュートリアル形式の授業を受けた。学生はIクラスで個別指導を受ける前に、漢字語彙リストを活用しながら課題図書の指定範囲(15~30ページ程度)を読んでワークシートの質問に答え、チューター制度を利用して、同じ学部の先輩であるチューターの日本人学生2名に100分間の学習支援を受けた。その後、チュートリアル形式のIクラスの授業では、わからない部分を確認し、課題図書にはどのようなことが書いてあったか、印象に残った部分はどこか、何を考えたか、チューターとの活動でどのようなディスカッションをしたかなどを話してもらった。また、適宜、インターネット上の関連資料を一緒に確認したり、関連する動画、音声を確認して内容について話したりした。なお、学期末にはa、bクラス合同でプレゼンテーションをした。プレゼンテーションでは、課題図書で学んだことのうち他の学科の学生に紹介したい内容を紹介して、考察を述べたあと、ディスカッションの進行をさせた。

3.3 チューター制度

学部カリキュラムとの接続性を高めるためにNEXUSプログラム生対象のチューター制度が設けられ、学生はチューターから主にIクラスの課題準備の学習支援を受けることになった(丸山2021)。将来的にはNEXUSの学生1名に対して同じ学部の日本人学生1名が支援する形となることが想定されていたが、初年度の2022年度はNEXUSの学生1名をチューター2名が支援する形となった。原則3名での対面の活動としたが、都合がつかない場合は1対1で活動したり、Zoomで行ったりしてもよいことにした。

チューターと留学生の活動が円滑に進むように、学期開始前にチューターを対象とした事前研修を実施し、NEXUSプログラム、チューター制度、やさしい日本語などについて説明した。また、海外旅行や留学、英語による授業で戸惑ったこと、大変だったこと、工夫してうまくいったことがあるか、普段どのような読解ストラテジーを使っているかなどを話し合い、どのようなサポートができるか考えてもらった。なお、チューターにとってもこの活動が気づきや成長の機会となることを期待されることを伝え、目標や課題を設定させた。

事前研修後、初回授業が始まるまでの間に、チューターには食堂や図書館などキャンパス内を案内して、プリンターの使い方などを紹介してもらった。

学期開始後は週に1度100分間、主にIクラスの課題の学習支援をしてもらった。チューター

には事前に課題図書各回の範囲を読んでワークシートの問いを確認することを求めた。当日は、留学生の疑問点に答える、ワークシートの内容把握の問いを確認する、図表の説明などワークシートのタスクをする、ワークシートの「チューターと話そう」のトピックについて話す、課題図書の理解に必要な日本の文化的・社会的背景を説明する、課題図書の一部を音読し合うというような活動を通して、課題図書の理解を促し、話したり聞いたりする練習をしてもらった。

ワークシートの「チューターと話そう」という部分では、読んだ内容に関する話題、次回の資料を読む準備としての話題のほか、大学生活や学部に関する話題も取り入れ、日本での大学生活に適応し、学部での学びの準備をしながらコミュニケーションの練習もできるように工夫した。

毎回の活動後、チューターには Google フォームで活動日時、内容、留学生の様子、振り返りなどを報告してもらい、Iクラスの授業前に記録を確認して状況を把握した。チューターから質問やコメントがあった場合はメールでやりとりをしたり、中間報告会で話したりした。

学期中に2回実施した中間報告会では、活動の様子や心配なこと、工夫してうまくいったことなどをチューター同士で共有してもらったり、コーディネーターから授業での様子や今後の目標を伝えたりした。また、学期終了後に事後報告会を開催し、一学期間の振り返りを行った。

当初、チューターとの活動は秋学期終了時までの予定であったが、春休み期間中に日本語を使う機会が大幅に減ることが懸念されたため、チューターとの活動期間を3月まで延長することになった。春休みはそれぞれの留学生を支援したチューターのうち各1名に継続してもらい、1回60分のZoomによる学習支援活動を1対1で計8回実施した。春休みの活動では、チューターに会う前に、留学生は1)学期中に扱った課題図書の内容を読み返し、2)冬休みに視聴した学部・学科に関連するNHK高校講座の番組や、その他の新しい番組を視聴し、1)2)のスライドを作成して、当日はプレゼンテーションをしたあとでチューターとディスカッションをした。2)の活動を入れたのは、3.4で後述するように、講義を聞いてノートを取ることが課題となっていたためである。春休みの毎回の活動後には留学生とチューター両者に Google フォームで活動内容と振り返りを提出させて、活動状況を確認した。

3.4 NEXUS 日本語 E

EクラスはIクラスと連動して進められた。学部の学修のために必要な日本語力、姿勢、行動について理解し、実践することができるようになることを目標とし、自身の日本語学習の課題を明確にするとともに、学部が指定する専門書を例として、日本語学習のしかたや、チューターとの学習等について学ぶ科目である。

自身の日本語学習の課題を明確にし、自律的に学んでいけるよう、学期開始時には長期・中期・短期の目標と今学期の課題を考えて発表させ、学期中間と学期末には、それまでにできるようになったことを振り返り、今後の目標と課題を考えて発表させた。また、毎回の授業では、Iクラスの課題図書の学習進捗状況やチューターとの活動状況、困っていることやよかったこと、できるようになったこと、難しかったことを報告させ、授業時間外の学習やチューターとの活動が滞

りなく進むようにした。詳しくは第4節で述べるが、このクラスで記入した自己評価や振り返りを分析し、発展的評価を行った。

また、課題図書を読み進めていくために、学期開始時は、本の構成、文献情報の確認方法、漢字語彙リストの使い方、便利なオンラインツールやアプリなどの利用方法、読解ストラテジーなどを紹介した。その他、大学では論理的かつ批判的に考える力が求められること、資料を調べて書く場合には出典を示す必要があることなど、大学の学びで期待されることについて指導した。

さらに、専門分野の内容について説明したり、意見を述べたりする力を養うために、Iクラスの課題図書で学んだことのうち、他の学部学科の学生にも関心を持ってもらえそうな部分を選んでプレゼンテーションとディスカッションをするという活動を計7回行った。

その他、当初は予定していなかったが、12月に入ってから、課題図書を読んで学んだことや考えたことについてリアクションペーパーを書く活動も3回行った。また、冬休みには、各学部学科に関連のあるNHK高校講座のオンライン動画またはラジオを4つ選んで視聴し、それぞれについてノートを取り、リアクションペーパーを書くという課題を出した。これらの活動、課題を追加したのは、「学びの精神」科目で聴解、ノートテイキング、リアクションペーパーに課題のある学生がいるという情報の共有があったこと、聴解を扱っているC、Dクラスの授業報告でも聴解が苦手な学生がいるという共有があったことによる。C、Dクラスでは主に社会問題に関する動画を視聴していたが、冬休みにはそれぞれの専門分野に近い内容の講義形式の番組を視聴することで、学部での学びで必要となる語彙や知識を増やすとともに、聴解力を伸ばし、実際の授業に近い形で、ノートテイキングやリアクションペーパーの練習をする機会を作った。

3.5 NEXUS 日本語 A～D、F～H、J

ここでは、I、E以外の日本語科目の目標と実践内容を示す。

A～Dクラスは学生が知識として持っている文型や語彙を、日常生活のみならず、大学での学習や研究活動の様々な場面で活用できるレベルに高め、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す科目である。

AとBは読解素材を軸に、その内容について確認してディスカッションしたり、小レポートを書いたり、レジュメを作ってプレゼンテーションを行ったりするクラスである。A、Bは2コマ連続で同じ教師が担当し、連携して授業を行った。当初、資料を引用した論証型の小レポートは二、三学期目の「総合日本語6-8」の科目で練習させて、Aクラスではアンケート調査についての小レポートのみ書く予定としていたが、一学期目の「学びの精神」科目で学期末に資料を引用して小レポートを書くということから、Bクラスでも授業で読んだ資料を引用して書く小レポートを追加した。また、少人数のクラスということもあり、Bクラスのディスカッションは、当初、話し合いの後の報告を行っていなかったが、「学びの精神」科目ではディスカッションの際に司会進行、書記、報告の担当を決めているということから、日本語科目でも担当を決めてディスカッションを行うことにした。

CとDは視聴覚素材を軸に、その内容を確認してディスカッションしたり、調べたことについてプレゼンテーションをしたり、小レポートを書いたりするクラスである。CとDも2コマ続きで同じ教師が担当し、連携して授業を運営した。学期に数回ビジターセッションも取り入れ、ボランティアの日本人学生といっしょにディスカッションを行ったり、プレゼンテーションを聞いてもらったりした。小レポートは番組の内容を報告して考察を述べるものを二つ書いた。ディスカッションについては、Bクラス同様に役割を決めて進めた。

Fクラスは、文型・文法を学ぶ科目で、特別外国人学生（半年から一年の短期留学生）と正規大学院生のための文型・文法4、5、6に併置された科目である。2022年度はプレースメントテストの結果、全員がF5となり、文型・文法5のクラスでNEXUS以外の留学生と一緒に学んだ。

Gクラスは漢字語彙の拡充を目的として、漢字の意味、漢字語彙の使い方に関する知識を深めるとともに、読んだり書いたりする力をつけることを目標とする科目である。学期前半は立教漢字検定の中級・上級の分野別テキストのうち各学生が決めた分野に沿って漢字学習を行ったが、学期後半はIクラスの各学部学科の課題図書で漢字学習も取り入れた。

Hクラスは日常生活と大学生活における聞く力、話す力、書く力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになること、具体的には適切な待遇表現を用いたコミュニケーションをすること、プレゼンテーションをして小レポートを書くことができるようになることを目指す科目である。授業では、日常生活、大学生活の中の様々な場面での会話を聞き、ロールプレイをしたり、メールやメッセージを書いたりした。また、聴解練習をしたり、効果的なディスカッションの進め方を学んだりした。さらに、日本人学生を対象にインタビュー調査を行い、プレゼンテーションをして、小レポートの作成をした。

Jクラスはさまざまなテーマの資料を読んでその内容を説明したり意見を述べたりする力を伸ばし、次の学期から学部の授業に参加できるようになることを目指す科目である。学部では授業の最後にリアクションペーパーを書くことが多いので、このクラスではリアクションペーパーの書き方を指導し、ほぼ毎回リアクションペーパーを書いた。リアクションペーパーはタイプして提出するクラスもあるが、このクラスでは手書きで書く練習をした。

以上が2022年度の取り組みである。

4. 発展的評価

日本語科目A～Jとチューター制度の運営は、「学びの精神」科目とも情報共有をしながら、「日本での生活や学部カリキュラムへのスムーズな着地を目指し、大学でのあらゆる学びに必要な日本語能力、基礎力を身につける」（立教大学、2022、19）ことを目標に行った。日本語科目A～Jと「学びの精神」科目の担当教師による「2022年度日本語教育センター活動報告」（立教大学日本語教育センター、2023）では、適切な語の選択や、難易度の高い内容の聴解、語彙力などに課題は残るものの、大学で必要となる日本語力が大きく伸び、今後学部の通常カリキュラムで学ん

でいくための基礎ができたことが報告されているが、学生はどのように捉えているだろうか。

以下では、学生の自己評価、振り返りを分析することによって、入学後一学期目の日本語科目とチューター制度が、RQ1) 次学期から所属学部の通常のカリキュラムで学ぶのに必要となる日本語力と基礎力を身につけるといふ点で機能しているか、RQ2) 日本での生活に慣れ、学部カリキュラムにスムーズに着地するといふ点で機能しているかを評価し、課題を探る。分析する主なデータは履修者4名 S1、S2、S3、S4 が自由記述式で回答した以下の a)～d) であるが、補足的に e) のデータも一部扱う。a)、b)、c)、e) は E クラスの授業内の振り返り活動のため、記名式となっている。d) は授業内活動ではないが、これまでの振り返りと同様に記名式とした。

a) 学期中間の振り返り

「今学期できるようになったこと、前よりも上達したと思うことを書いてください」

b) 学期末の振り返り

「今学期できるようになったこと、前よりも上達したと思うことを書いてください」

「今学期を振り返ってどう思いますか」

「春学期が始まるまでにできるようになりたいこと、もっと上達させたいことを書いてください」

c) 冬休み明けの振り返り

「冬休みの課題はどうでしたか」

d) 3月下旬の振り返り

「秋学期のチューターとの活動で良かったことを教えてください（学習面以外も含む）」

「春休みのチューターとの活動で良かったことを教えてください（学習面以外も含む）」

「チューター制度について、来年度に向けての改善点を教えてください」

e) 毎週の振り返り

「今回の課題への取り組みを振り返って、できるようになったことを書いてください」

取得したデータや個人情報は調査・研究目的以外には使用しないこと、個人情報は保護されること、データ使用への協力の有無が今後の指導・成績・活動に影響することはないことを説明したうえで、データ使用の承諾を得ている。なお、データのうち直接引用している箇所は、日本語の誤りも含め原文のままだが、個人が特定される部分は〈専門分野〉〈課題図書名〉などとした。

5. 調査結果と評価

5.1 次学期からの学部カリキュラムで学ぶために必要となる日本語力

ここでは RQ1) 日本語科目とチューター制度が次学期から所属学部の通常のカリキュラムで学ぶために必要となる日本語力、基礎力を身につけるといふ点で機能しているかを評価する。

5.1.1 身につけた力

まず、a) 学期中間と b) 学期末の「今学期できるようになったこと、前よりも上達したと思うことを書いてください」という質問と b) の「今学期を振り返ってどう思いますか」という質問への回答を分析するが、補足的に e) の毎週の振り返りの回答結果も参照する。学生 S1、S2、S3、S4 の全員が共通してできるようになった、上達したと答えたのは、聴解力、話す力、レポートを書く力である。その他、読む力、能動的な態度なども挙げられた。

聴解力については全員が挙げているが、学期中間の振り返りでは、学生 S1 が「聴解力」、S2 が「日本人（先生と学生たち）との会話を通じる伸ばせた聴解力」と回答している。また、学期末には、S1 が「電話して日本語でサービスを受ける（区役所など）」、S3 が「日本人の友達とよく交流し、メッセージを送るでも対面の会話でも色々あったので、次第に会話力や聞く力も前より良くなったと思う」、S4 が「毎日先生、クラスメート、チューターと会話しているので、聴力と会話もだんだん良くなっていると思う」と述べている。教師、クラスメート、チューター、友人とのコミュニケーションを通して全員の聴解力が伸びたことがわかる。ただし、春休みの課題として聴解力を挙げている学生もいるため、これについては後述する。

話す力についても全員が言及しており、特にプレゼンテーションについては全員できるようになったと回答している。その他、会話とディスカッションについて書いた学生もいる。心理面での変化についても4名全員が言及しており、S1 は「日本人と不安なしで話せるようになった」、S2 はプレゼンテーションで「ある程度の自信が持って」伝えたいことが伝えられるようになった、S3 は「ディスカッションや発表するのも緊張や怖さなどの気持ちはなくなった」、S4 も「日本に来たところの時、日本語で話す自信がなかった」が、学期中間には「日本人のクラスメートとディスカッションしたり、発表したり、プレゼンテーションをする自信」がついたと回答している。授業でプレゼンテーションやディスカッションをすることが多く、チューターとも毎週会話やディスカッションをしていたので、話す力が伸び、次第と自信がついたのだと思われる。

レポートを書く力も全員が挙げている。学期中間に、S1 は「レポートの書き方（前はレポートについて何もわからなかった）」「レジюме・レポートとは何か」がわかった、S2 は「レポートの作造に関する注意点・技能などたくさん学んだ」、S3 は「日本人の作文やレポートが英国や<国名>のほうと違うので、大変勉強になった」と回答している。学期末には S1 が「レポートで使う言葉・表現」がわかった、S4 が「日本語でレポートを書くことやプレゼンなどのスキルも身につけている」と記述している。書き言葉については J クラスで学び、その後、小レポートを A、B、H クラスで1つずつ、C クラスで2つ書き、フィードバックをもとに書き直しをしたため、レポートの書き方の基礎を身につけたと思われる。ただし、学期中間時点で S1 が「わかった」、S2 が「学んだ」、S3 が「練習」という言葉を使っていることから、今後も書く力を磨く必要があることを認識していると思われる。これは、春学期までの課題の部分で後述する。

聴解力、話す力、レポートを書く力は4名全員が言及したが、読む力については、学期中間と学期末の振り返りで S2 と S3 のみが回答した。S2 は学期末に「日本に来る前と比べ、聴解力と読

解力が大きく伸ばせるようになった」と回答している。S3はNEXUS日本語Iの学部の課題図書の見直しとそれに関連した力やストラテジーについて具体的に記述している。学期中間には、「今はそんなに時間がかかなくて、一回だけで、その章の内容を理解できるし、辞書で調べなくてもわからない言葉も推測できるようになってきた」、「前は本からの文を全部コピーして、ワークシートの質問を答えたが、今はだんだん自分の言葉でキーワードをまとめて答えを書くようになった」と記述している。さらに、学期末には「まだ辞書を使っているが、文章の意味だけを理解するように読むというより、その課題を理解し、分析するために読んでいた」と述べている。S3の回答からは、学期前半に推測しながら読むというストラテジーが使えるようになり、学期後半には目的を考えながら分析的に読む、つまり、より能動的な読みができるようになったことがわかる。S1、S4は学期中間と学期末の振り返りでは読解について言及していないが、Eクラスでの一週間の振り返りでは、読解力が向上していることを報告している。特にS4は、課題図書を一冊読み終えた第13回の振り返りで、「この本を読んだ後で、クリティカルシンキングの習慣も練習できた。私の生活には全部当たり前のことだと考えないで、物の本質や行為の動機について疑問する」と記述しており、課題図書の読解を通して、批判的な思考力も身につけたことがわかる。

S3とS4は読解について能動的な読みができるようになったと述べているが、S4は聴解でも能動的な態度について言及している。S4によると、「授業では受動的に講義を聞かずに、ディスカッションし、意見を述べるので、批判的思考が練習できた」という。次に課題を見る。

5.1.2 春学期までの課題

3.3で述べたように、秋学期終了後、春学期が始まるまでの2ヶ月間、チューターとの活動を継続することになったが、b)学期末の振り返りでは、春休みの課題を意識させるために春学期までに上達させたいことについて回答してもらった。

S1は「①話を聞きながら、メモをとること ②はやく読んで分かること ③レポート・リアクションペーパーで適切な表現を使うこと ④<専門分野名>の知識を深めること」という4点を挙げている。

S2は「日本語での授業でちゃんと勉強できるようになるために、聴解力とノートを取る力が早く伸ばせるようにならなければならない」、「それに加え、他の日本語能力とソフトスキルの成長も必要」と回答している。

S3は「日本語能力や専門の知識」に加え、「批判的思考」を身につけたいと回答している。「他の人の意見またはプレゼンを聞くと、疑問するのが難しく、「相手の話をしっかり聞いているが、感想や聞きたいことを聞かれるときは何も言えなくなってしまう」ためだという。

S4はレポートを書く時の言葉と文法、講義を聞く力、今学期読んだ課題図書のようなテキストを読む力を伸ばしたいということである。

レポートを書くのとき、言葉使いが良くしたく、文法を使うのが順調にしたい。また、実際に先生の講義と皆の会のほうが今の授業にある会話より速いので、聴力も改善したい。今学

期の学部図書はちょっと難しいが、面白いと思う。この本のような＜専門分野＞に関する本を挑戦したい。そこで、テキストを読む能力も進歩できると思う。

課題としてS1、S2、S4の3名が共通して挙げたのは、講義を聴くことについてである。5.1.1で示したように今学期4名全員、聴解力が伸びたと回答していたが、S1はノートテイキング、S2は聴解力とノートテイキング、S4は自然なスピードでの講義や会話を理解する力を磨く必要があることを認識している。

3.4で述べたように、学期半ばに「学びの精神」科目担当者から、ノートがきちんととれていない学生がいるという情報が共有され、Eクラスでは冬休みにそれぞれの専門分野に関連するNHK高校講座を視聴してノートを取り、リアクションペーパーを書くという課題を出した。c)の冬休み明けの振り返りで、S1はノートテイキングの難しさについて以下のように回答している。

冬休みの課題は役に立った。今後の授業にも役に立つと思う。具体的に、今まで勉強してきたことがまとめられていた。日本語については、わからないという言葉・内容もなかった。しかし、聞きながらメモを十分に取ることは少し難しかった。学部に入れば、教授の話聞きながらメモを取るの、この力を伸ばすために、たくさん練習した方がいいと思う。

S2も聞き取りとノートテイキングの難しさについて、以下のように述べている。

冬休みの宿題の番組を見てノートを取った次第、自分の聴解力とノートを取る能力は極めて良くないと気づいた。事前で学んだテーマの場合、何となく番組のペースと同じで聞き取ってノートを取ることができる。しかし、全く触れて来ないテーマの場合、何度も番組を止まって聞き直したり、単語を検索したり、ノートを取ったりしないと、殆ど番組の内容が理解できなく、ノートも全然取れないと思う。(以下省略)

S2の回答からは、事前に学んだことのないテーマでは語彙力の不足により理解が困難となったことがわかる。S2には、言葉の意味がわかれば講義もかなりわかるようになるので、語彙力をつける必要があるが、次学期の授業で教科書や資料がある場合には、事前に予習しておくことが重要だとアドバイスした。

S3は春学期までの課題として聴解力について書いていないが、以下の冬休みの課題の振り返りを見ると、講義を聞いてノートを取ることに特に困難を感じていないことがわかる。

冬休みの課題に対して4つのリアクションペーパーを書くことだったが、＜課題図書名＞の内容とにいてる知識があり、書くときはそんなに時間がかからなかった。毎回1つの動画を見ながらメモを取り、それから、すぐにリアクションペーパーを書いた。最初の動画以外は他のビデオが字幕がついていないので、時々意味がわからない言葉が出ていたので、読み方が正しいかどうかわからなかった。全体としての内容は理解できるので、特に難しい部分はなかったと思う。(以下省略)

聴解とノートテイキング以外で、複数の学生が春学期までの課題として共通して挙げているのは、速さへの対応、正確で適切な表現の使用、専門知識である。

速さに対応することはS1とS4が課題として挙げている。S4は上述のように通常の講義や母語

話者同士の会話の速さについていく力が必要だとしている。通常カリキュラムでの講義は履修者の大部分が母語話者で当然教師もクラスメートも自然な速さで話すことになるので、これに慣れる必要がある。一方、S1は読むスピードについて言及している。読解については、Iクラスで学科指定の課題図書を毎週15～30ページ程度読み、時間をかければ内容を把握できるようになったが、通常の学部カリキュラムでは読む量も増えるので、より短時間で読む力が必要になる。聴解も読解もスピードに対応する力が今後の課題となる。

正確で適切な表現を使えるようになることについては、S1とS4がレポートなどを書く際の課題として挙げている。前節で述べたように、今学期できるようになったこととして、全員レポートを書くことを挙げているが、正確で適切な語彙、文法の使用には課題があることを学生も自覚している。しかし、4名全員、次学期から他の初年次正規学部留学生といっしょにアカデミック・ライティングの科目も取るので、資料を引用して論証型のレポートを書くという練習を継続し、正確さや表現力は引き続き磨いていくことができると考えられる。

専門分野の知識については、S1、S3が春学期が始まるまでにさらに身につけたいと答えている。S1が読んだ課題図書もS3が読んだ課題図書も、その分野に関する背景知識や基礎知識を知っていることが前提となっていて、母語に訳したとしても知識がないと理解が難しい部分がある。Iクラスの課題図書のワークシートには、課題図書を読む前に背景知識が書かれた資料を読んだり、インターネットで調べたりするタスクも入れていた。専門分野に関わる基礎知識を身につけておくことは、今後の学部での学びの助けとなるだろう。

5.1.3 評価と改善点

以上をまとめると、学期末時点で学生が春休みに取り組むべき課題として挙げたのは、1) 講義を聞いてノートを取る力、特に馴染みのないテーマでの聴解力、2) 速さに対応する力、3) より正確で適切な表現を使う力、4) 専門分野の知識である。一方で、1) 聴解力、2) プレゼンテーションをはじめとした話す力、3) レポートを書く力、4) 読む力は学期中にかなり身についたと自己評価していることがわかる。また、一部の学生は、能動的に読んだり聞いたりする力や批判的に考える力が身についたと答えている。

この結果からRQ1)について評価すると、4名ともアカデミックな日本語力を大きく伸ばしており、学部で学んでいくための基礎力をつけたと言える。また、一学期目ですでに能動的に学ぶ態度や批判的思考力が意識できている学生も複数おり、今後の学部での学びが有意義なものになることが期待できる。学期末に学生が挙げた課題のうち、表現の適切さは確かに課題であり、本稿で引用した学生の日本語もまだ不正確な部分がある。正確さは4月入学の正規学部留学生にとっても課題であり、今後、学習を継続することで磨かれていくと思われる。しかし、講義を聞いてノートを取ることは二学期目からすぐに必要になる。この力をつけるためには、5.1.2で述べたように、語彙力をつけること、母語話者の自然なスピードに慣れること、話を聞きながらノートをとる練習をすることが必要となる。

2022年度に関しては、当初、秋学期中のみの予定であったチューターとの活動を春休み期間も継続できることになった。そこで、春休みはチューターに会う前にNHK高校講座を視聴してノートを取り、発表用スライドを作って、チューターに発表するという活動を通して、講義を聞いてノートをとる練習をし、語彙力をつけていくことにした。事前に学んだテーマであればノートテイキングができるが、馴染みのないテーマの場合には語彙力が不足し、理解に困難が生じるという学生に関しては、次学期は講義の前に資料を読んで予習することが助けになるだろう。また、Hクラスのロールプレイで練習したように、授業の前に講義の録音許可を求めて、授業後に音声聞き返す、聞き取れなかった部分についてクラスメートにノートを見せてもらうというようなストラテジーを使って対応することもできる。

2023年度については、C、Dクラスで扱う動画の数、テーマの種類を増やし、ノートテイキングの練習を増やすことにした。ただし、語彙の拡充や聴解力の強化には時間もかかるため、入学前課題でも聴解を練習させることにした。具体的には、2022年度の内容に加え、1) 指定したNHK for Schoolの番組を6つ見て感想を書く、2) 週に2つNHK手話ニュースを見て内容をまとめるという課題を出すことにした。手話ニュースはスピードがそれほど速くなく、動画の文字情報にはふりがなも振られているため、知らない言葉についても確認しやすい。入学前課題に取り組むことで、語彙力をつけ、聴解とノートテイキングに慣れることが可能になるだろう。

5.2 日本での生活、大学、所属学部への着地に関する結果と評価

ここでは、RQ2) 日本での生活に慣れ、大学、学部スムーズに着地するという点で入学後一学期目の日本語科目とチューター制度が、機能しているかを検証する。

まず、a) 学期中間とb) 学期末の以前より上達したと思うことについての回答、b) 学期末の一学期の振り返りの回答を分析する。全員がこれらのいずれかのデータにおいて、言語面だけでなく、生活面についても回答している。S1は「人間関係に関し、NEXUSと学びの精神の授業の学生たちと仲良くなって嬉しい」と述べている。S2は日本語力の上達に伴い「日本での生活も暮らしやすくなってきた」、「家族と離れ、外国で勉強して一人で生活するのは私の初めての体験なので、困ったことが多くあったが、何とか全部を乗り越えたと感じる。従って、学業の能力に加え、実践のソフトスキルも獲得できるようになってきた」と述べている。S3も「日本の生活に慣れた」、「立教で色々体験して（特にクリスマスの時）、友達も作ることができ、楽しく過ごした」、S4も「日本に住んでいる生活にだんだん慣れていて、問題がありません。友達もたくさんできて、毎日楽しかったです」と答えている。日本語科目とチューター制度だけの効果ではないが、一学期目に日本での暮らしが整い、人間関係を構築していることがわかる。

次に、d) チューター制度の振り返りを分析する。人間関係については、ここにも記述がある。S3は「日本に来たばかりとき、あまり友達ができなくても、チューターと一緒に勉強し、お話を聞き、そして、遊びに行くことも多かった。チューターとの活動が終わっても、時間を作っていただけ全然寂しくなかった」、S4は「春休みは帰国しなかったから、ちょっと孤独だと感じた。し

かし、チューターと話し合い、ボランティアなどの自分の生活について語るのは寂しくなくなった」と、二人とも「寂しくなかった」という記述をしている。S1も「学部の二人の先輩ができてよかった。留学生の私たちには分からないことが多く出てくると思う。その際、手伝ってくれる人がいることは非常に役立つのではないだろうか」と回答している。このように、チューター制度により、留学生活で支えとなる人間関係ができたことがわかる。

また、秋学期のチューターとの活動では、4名全員が1) 大学生活や学部のこと、2) 課題図書に関する専門的な内容やわからないことを教えてもらったことがよかったと回答している。

1) 大学生活、学部のことについては、例えば、S2は「大学生活や日本生活に関わる様々なこと（履修すべき授業、適切なスケジュールの作り方や日本人との会話によく使われる単語など）について勉強になってきた」と述べている。日本での大学生活に適応し、学部での学びの準備ができるよう、チューターとの活動で使うワークシートには、大学生活や学部について話すタスクも取り入れていたが、これも機能したと言える。

2) 課題図書に関する専門的な内容やわからないことを教えてもらったという点についても全員が言及している。例えば、S1は「(専門的な)内容をわかりやすく説明してくれた」、S2は「課題図書の中にある理解できない部分や他の専門知識をわかりやすく説明してもらった。そのために、自分の学習はより順調に進んでいた」と述べている。

なお、春休みのチューターとの活動の振り返りでは、自分自身の行動についても多く記述されており、チューター制度を利用することで春休み中も自律的に学んでいる様子が確認できた。S1は「春休みの長い間、専門的な内容に取り組むことができてよかった」、「レジュメなどを自分で作成した」、S2は「春休みなので、私は大学のシラバスやスケジュールなどに限られないので、好きに色々なことを勉強していた。それに役に立っていたのはチューターさんたちとの相談だった」と回答している。S3は「春休みにもう一度自分で学部の図書を復習ことができ、その理解が正しいかどうかチューターとの活動で確認できた。また、スライドやレジュメを毎週1個作る練習があることで、学期が始まるまで十分な準備ができていると考える」「NHK高校講座を視聴する活動で、〈専門分野〉に関する内容を見ながら、メモを取る練習もできた」、S4は「もう一度図書を読み、色々な言葉・知識が復習できた」と述べている。週に一度チューターとZoomで会うことで、チューターに会うまでの時間を有効に使い、自律的に取り組めたことがわかる。

来年度に向けてのチューター制度の改善点については4名とも特にないと答えている。ただし、その上で、S2は課題図書のうち専門的で複雑な部分が理解できない場合、チューターに説明してもらっても、自身の語彙力では理解できず、S2の理解できる言語で説明を聞くことができなかったと述べている。S2は2冊の課題図書を読んでおり、2冊目はかなり専門的で抽象度、難易度の高い本だった。チューターに聞いても理解できなかったという部分は、Iクラスのチュートリアルの授業で確認している。チューターは英語ではなくやさしい日本語で学習支援をする制度であり、チューターとの活動ですべての内容が理解できなかったとしても、日本語の授業でケアできていることから、チューター制度自体には問題ないと考える。S2自身も秋学期のチューター活動

の良かった点として「課題図書の中にある理解できない部分や他の専門知識を分かりやすく説明してもらった」と述べている。春学期からはIクラスのように専門書について日本語教師と確認する授業はなくなるが、本学の日本語教育センターには日本語相談室というサービスがあり、サポートが必要な場合は相談室を利用することも可能である。

以上をまとめると、日本語が上達するにつれて日本での暮らしが整い、人間関係も構築できたことがわかる。これは今後の学びの基盤となるだろう。また、チューターとの活動は大学生活、学部のこと、課題図書に出てくる難しい言葉や専門的な内容について教えてもらうよい機会となっている。さらに、春休みの活動は、各自が所属学部での学びに必要なだと考えることについて自律的に取り組むよい機会となったと言える。つまり、RQ2) 入学後一学期目の日本語科目とチューター制度が、日本での生活に慣れ、学部カリキュラムにスムーズに着地するという点で機能しているかについても、目標が達成されており、チューター制度が非常によく機能したと評価できる。

6. おわりに

本稿では2022年9月にスタートしたNEXUSプログラムの入学後一学期目の日本語科目とチューター制度の実践を取り上げ、発展的評価の取り組みを報告した。学期中は日本語科目だけでなく「学びの精神」科目の担当者とも課題を共有しながら、「日本での生活や学部カリキュラムへのスムーズな着地を目指し、大学でのあらゆる学びに必要な日本語能力、基礎力を身につける」(立教大学、2022、19)という大学の一学期目の目標達成のために、日本語科目担当者の協力を得て授業内容を調整した。また、学期中間、学期末、春休み終了時に学生が回答した振り返りを分析し、継続的な発展的評価を行った。

評価の結果、学生は日本での大学生活に慣れ、学部で学んでいくためのアカデミックな日本語の力や能動的で自律的な学びの態度を身につけたが、講義を聞いてノートを取る力を強化する必要があることが明らかになった。この力をつけるためには、語彙力をつけ、母語話者の自然なスピードに慣れ、話を聞きながらノートをとることに慣れる必要がある。

そこで、2023年度は、聴解を扱うクラスで講義形式の動画の視聴やノートテイキングの練習を増やすとともに、入学前課題として、オンラインの番組を視聴して内容をまとめたり感想を書いたりする課題を追加することにした。2022年度については、チューターとの活動を春休みも継続し、チューターに会う前に、学部に関連する番組を視聴してノートを取り、発表準備をさせることで対応した。同時に、実際の講義では、予習をしたり、録音の許可を求めて聞き返す、クラスメートにノートを見せてもらうといったストラテジーを使うようにアドバイスした。

今後は、一学期目の日本語集中履修期間を終えたNEXUSプログラムの学生が、通常の学部カリキュラムでどのように学んでいるか追跡調査をして、さらなるプログラムの改善に努めたい。

注

- 1) 異文化コミュニケーション学部のみ4年で卒業するカリキュラムとなっている。
- 2) 立教漢字検定については以下に詳細がある。<https://cjle.rikkyo.ac.jp/kanjitest/default.aspx>

謝辞

2022年度のNEXUS日本語科目のシラバスは日本語教育センターの元センター長、丸山千歌先生と検討して作成しました。学期中はセンター長の池田伸子先生と、学生の様子を観察し、目標と照らし合わせながら、日本語科目の内容を調整しました。NEXUS日本語Ⅰの全学部学科の課題図書のためのワークシートについては、金庭久美子先生、藤田恵先生、小林友美先生、任ジェヒ先生、小松満帆先生、鹿目葉子先生、丸山千歌先生と分担して開発しました。また、NEXUS日本語科目は山内薫先生、小森由里先生、長島明子先生、任ジェヒ先生、斉藤紀子先生、黄慧先生にご担当いただき、学期中の内容変更にも応じていただきました。ご協力いただいた先生方とチューターの皆様に感謝申し上げます。

参考文献

- 数野恵理（2022）「オンライン授業におけるグループ発表の試み——発展的評価による科目改善と再評価——」『日本語教育方法研究会誌』28巻2号、18-19.
- 数野恵理・金庭久美子・藤田恵・嶋原耕一・小林友美・丸山千歌・池田伸子（2021）「次世代に対応可能な日本語教育のための発展的評価の活用——正規学部留学生向けアカデミック・ジャパニーズのクラスを対象に——」『第30回小出記念日本語教育研究会予稿集』、65-59.
- 久慈恵子（2017）「教育分野における開発型評価の実際」立教大学日本語教育センター公開講演会、2017年3月1日、配付資料.
- パットン・マイケル・クイン（2001）『実用重視の事業評価入門 The New Century Text』大森彌監修、山本泰・長尾真文（編）、清水弘文堂書房.
- 丸山千歌（2021）「[講演] 正規学部留学受け入れの新時代——インクルージョン、コラボレーションの実現に向けた日本語教育——」、『シリーズ 新しい日本語教育を考える 10 正規学部留学生受け入れの新時代に向けて——海外の中等教育の事情に学ぶ——』、99-1112.
- 丸山千歌・小澤伊久美・池田伸子（2017）「日本語教育プログラムにおける開発型評価の導入：評価的思考を組み込んだプログラム運営とは」『日本語教育実践研究』第5号、90-102.
- 立教大学、2021、「2022年9月より新しい外国人留学生受け入れ制度「Rikkyo Study Project」を開始募集用ウェブサイト」を4月16日にオープン」、
<https://www.rikkyo.ac.jp/news/2021/04/mknpps000001qg4.html>、（2023年10月1日アクセス）
- 立教大学、2022、『NEXUS Program 2022年度履修要項』、立教大学.
- 立教大学日本語教育センター、2023、「2022年度日本語教育センター活動報告」、
<https://cjle.rikkyo.ac.jp/reports/PDF/report2022.pdf>、（2023年10月1日アクセス）